

メタストロン注(塩化ストロンチウム89)による、がんの骨転移による疼痛緩和を目的とした治療を開始しました。

二州地域初めて

地域がん診療連携拠点病院



独立行政法人国立病院機構

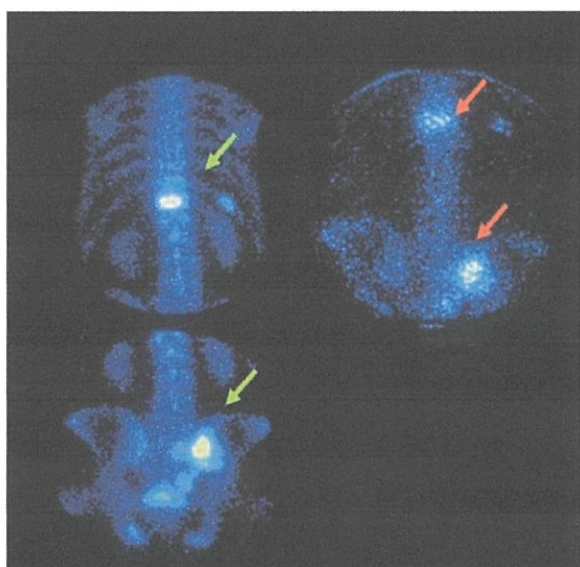
敦賀医療センター

この薬はストロンチウム89という放射線を出す物質を含んでおり、骨の成分であるカルシウムと同じように骨に集まりやすく、がんの骨転移部位では長くとどまり、その部位に放射線があたることによって痛みがやわらぐと考えられています。

この薬が効いた患者さんは注射後、通常1～2週間後から痛みがやわらぎます。

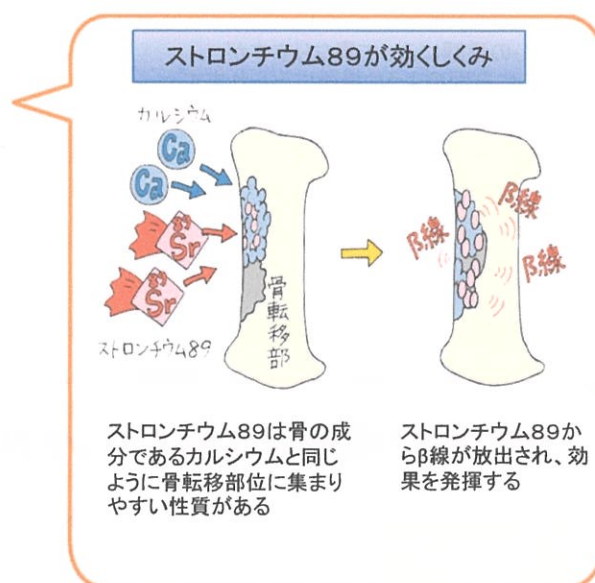
体内ではストロンチウム89のβ線は平均2mm最大8mmしか飛びません。

このため周囲に影響を与える危険性はありません。



ストロンチウムは、骨シンチグラフィーで使われる診断薬と同様の部位に集まる。

ストロンチウム89が骨転移部位に集まり効果を発揮する



- 1～2週間で痛みがやわらぐ
- 痛みの具合を定期的に観察する

メタストロン注による治療は、3か月以上の間隔をあけて繰り返し行うことができます。

まずは主治医にご相談してください！

治療にあたっては、主治医からの紹介状を持参のうえ、当院緩和ケア外来を受診していただき、適応の判断(骨シンチ及び血液データ等)をして、適応と判断すれば後日来院いただき、注射を行うだけの簡単な治療方法です。

なおこの薬は骨の痛みをやわらげることを目的としており、がん転移そのものの治療が目的ではないことをあらかじめご理解ください。

がん骨転移とは？

転移は、悪性腫瘍からがん細胞が離れ、血液やリンパ液の流れに乗って遠くの臓器やリンパ節に流れ着き、そこで増殖を始めることで起こります。骨は転移しやすい臓器のひとつで、すべての悪性腫瘍の約半数に骨転移が生じるといわれています。なかでも前立腺がん、乳がん、肺がん、腎臓がんなどで多くみられます。



痛みによって活動を制限されたり、夜眠れなくなったり、痛みが強く寝たきりになったりすることも……。精神的、社会的な苦痛にもつながります。

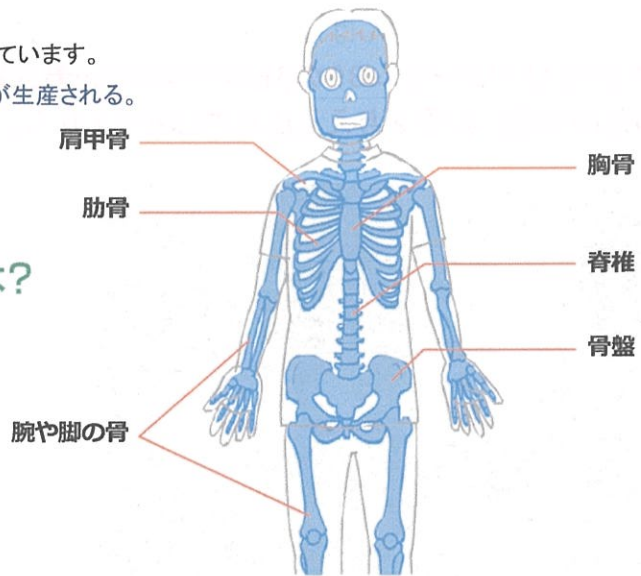
なぜ痛むの？

骨転移で痛みが生じる原因は、次のように考えられています。

- ・がん細胞から、痛みや炎症のもととなる刺激物質が生産される。
- ・大きくなった悪性腫瘍が、骨の神経を刺激する。
- ・骨転移した部位で酸性が強まり、刺激となる。
- ・骨の代謝のバランスがくずれる。

骨転移が起こりやすい場所とは？

がんの種類によって異なりますが、おもに右図のような場所にみられます。



骨転移の痛みは治療でコントロールできます。

鎮痛剤

非ステロイド性消炎鎮痛剤 (NSAIDs=エヌセイズ) とオピオイド (麻薬性鎮痛剤) を用います。症状をみながら、薬の量を増減したり、薬自体の種類 (強さ) を変えたりして、痛みを制御していきます。



ビスホスホネート製剤

骨転移のある部分に作用して、進行を遅らせる効果のある注射薬です。骨転移に伴う症状の出現を遅らせたり、減少させたりする効果があります。

放射線照射 (外部照射)

骨転移のある部分に放射線を照射し、がん細胞の病勢を抑えることで鎮痛作用を発揮します。全身状態や症状にあわせ、放射線の量や治療間隔をきめていきます。



メタストロン注による治療

(ストロンチウム89による
アイソトープ内用療法)

放射線を出す性質を持つ元素を放射性同位元素 (アイソトープ) と呼びます。アイソトープの一種であるストロンチウム89は、カルシウムとよく似た性質があり、体内に注射すると骨に集まります。特に、骨転移のある部位によく集まり、そこで放射線を集中的にあてることで痛みを取りのぞくことができます。

これらの治療は、組み合わせて行うことがあります。